

ごたいへいきしらいしばなし

## 碁太平記白石噺

### 〔解説〕

安永九年（一七八〇）江戸外記座にて初演。紀上太郎、烏亭焉馬、容楊黨の合作による全十一段の時代物です。由比正雪の乱に、奥州白石であった姉妹の仇討ちの実話を絡ませた筋書きですが、仇討ち物なので時代を太平記の時代に置き換えています。七段目で姉妹が巡り会う「新吉原揚屋の段」は、姉妹の言葉使いの違いがおもしろく、芝居でも人気となり度々上演されています。

### 〔新吉原揚屋の段 あらすじ〕

大黒屋の傾城宮城野は、大黒屋の亭主惣六が連れてきた田舎娘おのぶが故郷に残した妹だと気づき、二人きりになったところで母親が持たせた証拠を互いに見せ合い、再会を喜びます。しかし、おのぶの口から父母の死を聞き、妹とともに父の仇討ちを決意し、廓を抜けたそうとします。それを立ち聞きしていた惣六は、曾我兄弟の仇討ち物語を引き合いに出して二人を諫め、その時が来るまで待てと諭すのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

## 新吉原揚屋の段

入相の、鐘さへはやく、暮れはてゝ廓のうちは万灯  
会歌舞の菩薩の色揃へ、わけて全盛宮城野が部屋は上  
品奥二階、箆筒長持鏡台の、埃取りまで綾錦袱紗なり  
けるありさまなり。

見やる宮城野おのぶが傍、『もしやそれぞ』と摺り寄  
つて

「さつきにからの話を聞けば、姉を尋ぬる人さうな、  
奥州はどこらの生まれ、なんといふ所ぢやえ」

「アイサア、奥州は白坂近在、逆井村といふ所」

「フウその逆井村といふ所に、与茂作といふお人があ  
らうがの」

「アイサ、その与茂作といふのはめらしが父」

「ヤアそんならわしが妹」

と鎚り寄るを突退けて

「イヤサ〜、母の常に言はしやるには、『姉さあ

の方にもしるしがある、それを証拠に名乗り合ひ、委  
細心底打明けろ』と言ひめした、それがあつたら早う  
つん出し、見せてくんせえ姉さあ」

と懐かしながら油断なき

「オ、利口な人〜、疑やるも尤も」

と立つて箆筒の袋棚襖開けば恭しう、浅草寺の観世音  
扉表具に押並べ、飾り置いたる筒守り見るに妹も疾し  
遅し首にかけまく壺井の守り

「ア、コレ、この姉が国を出る時、母様が大事にせい  
と下さんしたこのお守り、父様は楠家のご浪人ゆゑ、  
河内の国壺井八幡様のお守り、それを持つてゐやるか  
らは妹ぢや〜コレ、よう顔見せてたもいなう」

「オ、姉さアでござるかいなう、会ひたかつた」

ともろともに、嬉し懐かし鎚り寄り、ほかに詞もなく  
ばかり。

「オ、妹、よう尋ねて来てたもつたの、年端もいかぬ

そなた、父様なりと母様なりと、いづれぞ付いてお出でであらう、がもし道中ではぐれてか」

と、問はれて『わつ』と声を上げ、

「ア、コレかう巡り会ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては済まぬ、サどうぞ」

と、尋ぬる姉の心もそぞろ

「エ、遠国隔つた姉さあ、それで何にも聞かねえな、父は五月田植の時分、代官志賀台七という悪侍に」

「ヤア〜何と言やる」

「ぶつ斬られてお死にやり申した」

「ヒヤア」

とびつくり差込む癪しやく

「アアコレ姉様いの〜」

「ア、とつとモウ悪い時、そうしてどうぢやその後は」

「サア俺だけでもすんでの事殺さるゝところ、庄屋の伯

父さあが駈つて来て、力んでみても肝心の、証拠なければ父は犬死、雉子と鷹なりや敵討の勝負もならず、すごら〜、そんどの許嫁のご亭にも対面はしたれども、これもこのお江戸さあへ帰り申す、後は俺だけと母とばかり、頼りない身に下地の大病」

「ヤア〜お煩ひでもあつたかいの、シテご本復なさつたか」

「イエ〜六月十六日に、悲しやつひにお死にやり申した」

「ヤア〜スリヤあのご養生も叶はなんだか〜いの」

「コレ話聞いてさへそれがいに欺かつしやるもの、直きに見とらへた俺だあげが心、コレ泣かつしやるは道理だけれど、頼りに思ふ姉さあ、また病氣おこしてはなほか済まねえ、〜」

「イヤ〜、なか〜煩ふやうな事ぢやない、さ

うしてどうぢや〜」

「サア、なしよにもかしよにも俺だあけ一人、庄屋の伯父さまが引取つて、『奉公しろ』と言ひめすけど、何の奉公どころかい、口惜しいと、悔しいで、後先思はず、檀那寺へ駈込で、坂東順礼すると言つて笈摺もらい、国元さまを突走つたも、そんだに尋ね合つたら、姉妹心を一致にし申いて、父の敵が討ちてへばつかり、道中すがらの艱難も、そんだに会ふが楽しみに、がいに、苦勞とは思はなんだ、しかし会つたらかつぱりと、しよろつ骨が抜けたやうな、コレそれがいに歎かつしやる手間で、妹はるばる尋ねてよう来てくれた、めぐいめらしと言ふてくんさい姉さま」

と、あやも泣入る稚な氣に長の旅路の憂き苦勞、思ひやるせも宮城野に、続くは末の、松山を、袖に、波越す涙なり、歎きのうちも姉はなほ、妹が背を撫でおろし

「オ、そのやうに思やるも尤も、しかしそなたは父母に、長う添やつた身の果報、コレこの姉を見やいなう、年貢に迫つて父様は水牢、その苦を助けうばつかりに、コレこの廓へ身を売つたを、思ひ返せば十二の年、そなたは五つ子顔さへ見知らず父様のご最期や、母様の死に目にも会はぬといふ悲しい不孝な、はかない事があらうかいの、かうした事とは露知らず、この妹は健なかな知らぬ、父様、母様、お煩ひでもあらうなら、よもや知らして給らうもの、便りのないを杖柱、首尾よう年季を勤めたら、国へ帰つてお二人に、樂させまして、どうしてと、色や浮氣を嗜んで、勤め大事と許嫁の殿御の事も、そなたの事も、恋し懐かし思ふのを樂しみ暮した甲斐もなう、名乗り合つたは嬉しいが、悲しい話聞く姉が心も推してたもいの」

と、手を取交す姉妹が涙涙を、立聞きも貰ひ泣きして立分の、暖簾も濡る、ばかりなり。